

## 新型コロナの中での博論作成および就職活動の困難/工夫

楊 慧敏

### <要旨>

日本で最初に新型コロナ患者が報告されたのは、2年半以上前の2020年1月中旬である。当時、博士後期課程3年生の報告者は、指導教員の指導を受けながら博論の枠組みの確定および執筆に取り組んでいた。新型コロナの感染が拡大しているが、半年後の夏、つまり2020年7月ごろに母国である中国に戻って現地調査（行政機関、高齢者施設でのインタビュー調査）ができるだろうと楽観的に考えた。

ところが、新型コロナの終息の兆しが見えない状況が続き、現地調査の実施の見通しが立たなくなり、日々焦りを感じながら過ごしてきた。結局のところ、現地調査ができず、指導教員をはじめとする先生方のご指導、院生のアドバイスに基づいて博論の枠組みを大幅修正し、完成原稿を2021年に提出した。

博論の作成および提出後の修正をしながら、報告者は日本での就職活動を行った。応募条件を確認した上で数カ所の大学に申請書類を送付した。だが、博士学位の「取得見込み」および、在留資格の変更などのことで採用に至らなかった。

本報告では、報告者の個人的な経験から、主に①現地調査の実行が難しい中での博論枠組みの変更、②外国語で博論の作成、③博士学位「取得見込み」の状態の就職活動の3つの面から新型コロナの中でのどのような困難に直面したのか、それらを乗り越えるためにどのような工夫したかについて述べつつ、そこでみえてきた上記の3つの限界と新たな可能性を共有したい。